



Triumph onedollar

～勝利への放浪者～

リューヤ

前回のおさらい

もう長いこと続けられた戦い(という名の狩猟)に疲れ果てた自分たちの武器を鍛え直すため、一行はシーバルーで一番の武器商業街「グレネド」へ足を運ぶこととなった。

そこでジン達が出会ったのは3人の家族で経営している小さな武器屋「ヴァジュラ」と、その店で扱われている芸術品のような美しさを兼ね備えた武器の数々だった。ジン、アゲート、虎眼の三人はこの街で最も大きな武器屋「グングニエル」を全店舗店じまいさせるためにグレネド名物の武器の祭典「ウェポン・フェスティバル」に参加することとなる。

しかしグングニエルの妨害行為がヴァジュラを襲い、祭りの参加に使う武器を奪い取ってしまった。

虎眼とジンが武器を取り返すためにグングニエルの武器倉庫へ駆け出し、待ち構えていたグングニエルの中でも腕の立つ用心棒を瞬殺し、首謀者のオーナーもボロ雑巾に変え武器の奪還に成功。二人は急いで祭りの会場へ急ぐのだった。

「さあ試合もこれが第一回戦の大詰め、一回戦第11試合を始めまああす！！」

祭りの司会進行を務める男がマイクを振りかざすと、スタジアムを埋め尽くす大勢の観客が砂漠の日差しのように熱い声援を上げ一気にヒートアップした。その中で唯一クールな眼差しでメインアリーナを見下ろしている観客が二人いる、それがジェットとドクターだ。二人は実につまらなそうに顔をしかめながら、売店で買って来たポップコーンとチーズスナックをつまんでいる。

「大陸最大の武器の祭典を売り文句にしてる割にやあ、思ったよりレベル低いなこの祭り」

「同感だね、キシキシ・・・もっと血肉が噴き出る仕様になっているのかと思えば少しでも深いケガを負ったら即終了なんて、生温すぎる。」

日常生活の中で常に命のやり取りをしている方がよっぽど不自然な気がするが、ここは口にしないでおこう。

この祭りにもルールは存在している。

- 1：手持ちの武器が破壊された者
- 2：競技中リングの上で膝をついた、及び場外へ追い出され、10カウントを取られた者
- 3：審判が戦闘不能と認められた者

以上の項目に当てはまった者、敗者とみなす。

あくまでも死人はNGなのがこの祭りの最低基準らしいが、二人が見ている中で特に記憶に残るようないかにもな武器使いの姿は少なく、この程度なら割と日常的に戦いなれているのが正直な感想だ。

今アリーナの中へ、この第一試合最後の選手が入場してきた。相手は3人組、大きい図体をした男と子分二人、みんな同じ槍を持っている。槍のメーカーはこれまたグングニエルと司会がアナウンスしている。もうその店の紹介もいい加減聞き飽きてきたことろである。

「対しますは、ウェポンフェスティバル初出場の新人チーム、AAAA（名無し）です！使用する武器は武器屋ヴァジュラの剣とガントレットとバトルアックスでございまああす！！！！」

紹介が終わり入場口が開くと、スタジアムの観客のボルテージはますますヒートアップした。その大歓声の中、手を振りながら歓声に答えるアゲートと無表情の虎眼、そして耳を塞ぎながらジンが姿を現した。

あれからジンと虎眼の二人は開会式にこそ間に合わなかったが、事情をスタッフに説明し何とか中に入れてもらうことができ、今こうしてリングの上に上がることができているのだった。

「ウッヒョ～、こいつは凄えさ！昔この旅人のオーディションやった時の比じゃねえさ！」

「確かにな・・・」

「耳が痛え・・・」

選手専用の控室(個室)へ当された時には、もうジンはクタクタだった。朝から数百mの全力走の後に軽くドンパチかました直後にまた来た道を全力で逆走、しかも背中に人一人背負って走ってきたら今度は間髪入れる間もなくこの祭りときたもんだ。こんなことを続けて息切れも起こさないのは世界広しといえど、虎眼くらいしかいないだろうと感心する。さっそくベンチに腰かけてタバコに火をつけるのだった。

「ああしんど・・・始まったばかりなのにもう疲れた」

「ジン、ここ禁煙さ」

「マジで？」

「うむ、灰皿もない。本気で戦いに来ている選手らはみんなタバコを吸わないのは基本だろうからな」

「へーへーどうせ非常識ですよと・・・っち」

楽しみにしていた一服もままならず、ジンは余計にイライラし始める。

気を紛らわせるためにジンはさっき入口でもらったこの祭りのトーナメント表をその場に広げた。今年の祭り参加者は全部で23組、ジンら3人のチームは本来もう少し早く試合が始まる予定だったが、事情が事情のせいで自分たちの試合を大会側が何とか引き伸ばしてくれたのだった。おかげさんで次の第2試合目の順番は2回目になっている。

この控室まで響いてくる観客たちが今観戦しているのは2回戦第1試合、もう間もなくジン達の出番が回ってくる。

「ハァ、立て続けにこれはさすがにキツイだろお？」

「鍛えが足りないぞ貴様、もう少し修行をしろ」

「生憎オレはお前みたいに筋肉ダルマになるつもりはないのでお断りする」

「・・・まあいいだろう、最終的なツケは自分に回ってくるということだけを覚えとけ」

「努力するよ・・・」

「さっきから二人の会話が不毛さあ・・・」

この会場に二人が遅れて到着するまでの経緯をよく教えてもらっていないアゲートにとって、今のこの会話にはやたらと鋭いとげが見え隠れしているように見える。そんなこんなしているうちに、係員が部屋の中に入ってきて次の試合が始まることを

知らせに来た。ジンは思っていたよりもお早い登場にイラ立ちながら、3人はスタジオへ向かった。

さっきと同じ入場口をくぐると、観客の声援がジン達の声飲み込むかのように騒ぎ出した。リングの上に立っているレフリーもジン達の試合の光景は強く印象に残っているようで、今年の祭りは盛り上がりそうだと絶賛している。実際にはこの祭りの内容などどうでもよく、ただグングニエルの連中をボコボコにできればそれでいいのでジンと虎眼は特に盛り上がり欠けている。

「それではお待たせしました！二回戦第2試合、チームA A A A v s チーム羅刹の試合を開始しまああああす！！」

レフリーのアナウンスと同時に観客が盛り上がり、ジン達もリングに上がった。この試合ではどんな相手が現れるのかワクワクしているアゲートに対し、ジンはここでもあくびをかいて退屈そうなオーラを漲らせている。

ところがこの観客の声は間もなくして静まり返ってしまった。それどころは妙なざわめきがスタジアム全体に溢れている。

その原因はこの試合の相手方にあった。改めて言うておくが、この祭りの参加資格は、最低でも二人以上が規則とされている。それなのに今リングの上に上がってきた人数は、たったの一人だけだった。

今回の相手は男、上半身裸の体にさらし巻き、白い道着に雪駄履き、エモノは物干し竿のように長い柄の先端にくっつけられた巨大なハンマー。しかもこのハンマーはデザインがかなり奇抜だ。その外見はまるで拳骨、まさに握り拳をそのまま巨大化したようなデザインときたもんだ。

男はそれを肩に担ぎ、ギンとした瞳で三人を見つめている。

「・・・なんだあいつ？」

「さあな・・・しかしあの目、面白い目をしている」

「・・・強いさね」

強そうな相手を徐々に目の当たりにした虎眼は、頬をひきつらせ久しぶりの笑顔を見せてくれた。これは非常に危険な笑顔なのは言うまでもない。

だが今回アゲートもあの目を見た途端、急にあの男から目を離せなくなるような奇妙な感覚になってしまう。

「ええ、チーム羅刹のメンバーは本来二人でしたが、一人が家族の危篤という連絡を

受けて祭りの参加をリタイアしてしまいました。しかし残されたもう一人がどうしても参加を続けたいというので慎重に審議を重ねました結果、この試合だけチーム A A A A にも一人だけで戦って貰うという特別ルールで試合を続行したいと思います。」

その主催者側から突然発せられた勝手な臨時ルールに会場の観客はもちろん、ジン達もどよめきを隠せなかった。

この祭りは規則上二人以上での参加が基本事項であり、たとえ相手との人数が2対5であった場合少ない方の人数に合わせて5人のチームから二人だけを選出して試合をするというシステムは見たことあったが、まさかたった1人同士のタイマン勝負は前例がない。

しかしだからこそ面白そうなのに違いはない。しばらくの間どよめいた観客たちは、いつの間にかその声を声援に変えて再び盛り上がり始めていた。その観客たちと同様に、ジン達も仕方なくその条件を飲むこととする。というより飲むしか選択肢は残されていなのの方が正しい表現だろう。

「まあしゃーねーっちゃ、しゃーねーか・・・」

「ん、この勝負には誰が行くんだ？できれば俺が行きたいところだが」

「んん・・・別に文句はねえよ、オレじゃなけりゃどっちが出ても」

タバコも吸えず疲れも取れていないジンは半分やる気がなくなってきた。どっぴかに責任を乗っけて自分は高みの見物と洒落込むつもりでいっぱいなのは目に見えていた。

その態度に少し荒立ちながらも虎眼がリングに上ろうとする直前、後ろからがっしりと肩をつかまれた。この状況でそんなことをするのはジンを除けばあともう一人しかいない。何のつもりか聞き出すため振り返ろうとする前に、肩を力いっぱい引っ張られ虎眼は思わず転んでしまった。

こんなことをしたのは、アゲートだった。普段ならばこんなことをしないような男なのに、突然どうしたのだろうか？珍しい行動にジンは前に出ようとするが・・・途中でジンの足が止まってしまった。

アゲートの表情、それが今まで見たことのないような笑い方をしていたからだ。ジンの顔も虎眼の姿もすでに視界に入っていないようであり、見据える先に居るのはあのリングに立っている男だけのようだった。

そのままアゲートは斧を担ぎ直すと、何も言わないままリングへ登って行った。

「・・・なんのマネだ？」

「オレが知るかよ・・・だけどなあ、なんとなくマジっぼいぞ？」

何か一言言ってやりたくても、何かしら静止の手を伸ばすための時間もタイミングもあったが・・・ジンは何もできなかった。仕方なくタバコをその場でくわえると、虎眼の何か悟ってくれたように何も言わず立ち上がり勝負の行く末を見守ることにした。

今のアゲートのテンションはMAX状態だった。あの男の目、一度見た瞬間から何か燃え上がるような感覚に襲われた。燻っていたマッチの火が、一気に山火事のような火力まで増したような気がする。体中が熱くなる、この熱を発散させるにはあの男と本気でドンパチする以外方法が思いつかなくなった。

リングの中央で二人が並び、あとはゴングを待つばかりとなった。二人の身長も体格も似ている、違うのは自分の獲物だけ。

アゲートはいつも通り両手で斧を構えるのに対し、相手は片腕であの拳骨ハンマーをグルングルン振り回し地面に叩きつけた。するとどうだろうか、叩きつけられた柄の先端を中心に、同心円状にスタジアムの床にヒビが入った。アゲートの斧でさえ重量は15kg、方やあの拳骨には、いったいどんな重量が存在しているのかと思うだけで、胸がバクバクと跳ね上がり全身に心地よい緊張感が生まれてくる。

「レディイイイイ、ゴオオオオオオ！！！！」

レフリーの合図でゴングが鳴ると同時に先手と仕掛けたのはアゲートの方だ。前身から突っ込み体重と加速の勢いを加えた上段からの攻撃、男はハンマーの・・・拳骨で例えるところ甲の部分で受け止めた。直後二人の獲物の間から車同士がぶつかり合うような凄まじい衝突音が会場全体に轟いた。

こうなることぐらいはすでに予想できていたアゲートは一度離れると、今度は真横から斧を薙ぎ払うが、相手もバカではないらしく冷静に、今度は柄で攻撃を受け止めた。そのまま刃を払いのけると今度は向こうの攻撃、両手で担いだハンマーを気合いとともに振り下ろしてきた。

相手の様子を見るためにここは受け止めずに離れて回避することを選んだが、それが天運だったようだ。

ドゴオオオオオオン！！！！

たった一撃・・・たった一撃が床に衝突した瞬間、地震のような衝撃と共にリング全体に亀裂が走り、あちこちへ小石が飛び散った。

この驚くべき光景にすべての客が自分の声を忘れ静かになり、リングの外にいたジンと虎眼も目を丸くしてしまった。

「・・・・・・・・何・・・・・・・・だと？」

「最っ強にヤバイだろ・・・・・・・・アイツ人間か？」

一番に驚かされたのはアゲート本人だろう。自分でも地面にヒビを入れるくらいのごとは経験があるが、たった一撃でこのリングに致命的なダメージを与えるなんてことはしたことがない。バランスを崩しコケそうになるのを必死に堪え相手を見据えるところだろうか。

笑っていた。

口を開き長い舌をグロテスクに外へ放り出しながら、片眼を見開きアゲートを睨み・・・笑っていた。これを見せられた燃えないアゲートではない。こちらも負けじと頬肉をひきつらせ歯を剥き出しにして笑うと、足に力を込め直して加速、もう一度正面からの激しい殴り合いが始まった。

軽快に斧を振り回し、左右から上下から、時には正面から槍のように突き出して攻撃を繰り返すアゲートに対し、相手は拳骨と頑丈な柄を巧みに操り攻撃をかわし、隙を見つけてはあの重たい一撃を繰り出してはリングを破壊する。一撃分の重さは圧倒的に向こうが有利であり、まともに食らえば一気に形勢が逆転してしまいかねないため、アゲートは一撃が来るような場合には迷わず距離を取って逃げることに専念することにした。

楽しくなってくる。

この一撃一撃を与える瞬間が、あの一撃をよける瞬間が、あの男と目が合った瞬間が、ぶつかりある瞬間が・・・。

全身の筋肉が喜ぶように躍動し、頭から流れ落ちる汗が飛び散り、体内のアドレナリンがどんどん上昇していくのを感じる。視線が重なるたびに、二人はきっと同じことを考えていることだろう・・・それはきっと本能的に。

「「コイツは自分と同類、この男こそ、自分にとって最大の好敵手だ！！」」

ジンは二人の激突しあう姿を眺めながら、3本目のタバコを吐き捨てた。同時に、さっきから何度も何度もライターを開けたり閉めたり、カチャカチャカチャカチャ鳴らしている。あの二人の試合を眺めるたびに、どうも何か不自然でならないことがあるのだが・・・それが何なのか実のところサッパリ分からなくてイライラしている最中なのだ。

「・・・そんなに気になるのか？」

「あ・・・何が？」

「貴様の感じている疑問だ、なんとなく分かるぞ・・・アゲートの強さのことじゃないのか？」

・・・ああ、言われてみてやっと気が付いた。ジンの感じていたこの喉に詰まったようなもやもやする違和感の正体。

「アイツ、あんなに強かったっけ？」

「ああ、強いぞ・・・俺が保証してやる」

ジンのふいに投げられた質問に対し、虎眼が太鼓判を押して答えた。この度をしている間ジンがアゲートに抱いていた印象は・・・

- 1 アホ
- 2 トラブル屋
- 3 お人好し
- 4 大飯喰らい
- 5 ボケ担当

以上の5点だけだった。アイツが強いなんて印象を持ったことは正直一度もない。いやでも、ハイエドラゴンの一件もあるし一概にアイツが弱いとも言い切れないが・・・仮にでもあのラプチナでオーディションを合格しているわけだし・・・ムウ。

「逆に聞けばよう、なんでお前はアイツが強いと知ってた？組手でもしたのか？」

「いや・・・アゲートはな、努力派だったんだ」

「？」

「覚えているか？ジルコンの港で足止めを食らったこと」

覚えていない方がおかしい。あの忌々しい詐欺師と賭けをして勝ちして金をブン捕り、船に乗る金を作ったはいいが当の船がとっくにいなかったあの頃だ。詳しくは本編を読み直せばいいだろう。(何言ってんだオレ?)

「それがどうかしたのかよ？」

「足止めを食らった3日間、アイツはどんな生活をしていたか知ってるか？」

「ああ・・・朝は昼近くまで寝てて、風呂に浸かって飯食ってそしたらまた寝て・・・
・くらいの印象しかねえな」

「それはそうだろうな、俺もあの日まではそんな気持ちだった」

「・・・何か知ってるんだな？話せよ」

「俺から口外したことは言わないこと、そして本人にも黙っておくこと、いいな？」

「OK」

街で最初の夜、その時俺は寝つきが悪くて少し体を動かそうと思って、外で軽くジョギングをしていた。港へ着いたらそこで潮風を浴びながら太極拳もやっていた時だ。近くで聞き覚えのある声が聞こえてな、妙に気になって確かめてみたらそれはアゲートだった。

その時のアゲートは服を脱ぎ、上半身裸の状態で一心不乱に斧を振り回してトレーニングに勤しんでいたんだ。

一息つき始めたところで声をかけてやろうと思ったが、アゲートはボトルの水を頭からかぶると、そのままほとんど休まず今度はどこかから持ってきた鉄パイプを振り回し始めたんだ。ただ振り回していたわけでもなく、あれはれっきとした棒術の技だった。

それから立て続けに槍術の型を終えると次は角材に持ち替えて剣術の簡単な型を取り始めた。水をガブ飲みしながらまた頭から浴びると今度は武術の型まで始めた。徹底的に体を苛め抜き、肉体に様々な武器の使い方や武術を叩き込み体を鍛え抜く。しかもそれが誰の目にも触れないようにしているのがアゲートらしくない。

しかし落ち着いて考えてみれば、俺には拳があるしジンには天性的な剣の才能がある、ジェットには炎の魔術を操り、ドクターは類稀なる知識と頭脳を持ち合わせているのに対し、アゲートはこれと言って派手に目立ったところがない。ならばせめて、少しでも力になるためにこうやって秘密裏に体を鍛えているとしたら？自分にとってこれしか役に立てそうなことがないとしたらどうだろうか？

アゲートがこの旅にかけている思いが誰よりも重いと聞いている。自分のためではなく、自分の家族のためにこの旅を終え、その謝礼金で家族を養うためだと言っていたのを聞いたことがある。

俺はそのまま、何も見なかったことにしてその場を立ち去り、あえて誰にも言わずに普段と変わらない態度で接することがアゲートに対する礼儀だと思った。

「・・・そういや言ってたってけな・・・『自分はマジの気持ちでここに立っている、誇り持ってこの服の袖を通して』って」

「いい加減な性格をしているように見えているが、その実責任感が強い上に俺達以上に誇り高い覚悟を持っている。そんな男が弱いはずがない」

なるほど、同感だ。もしその話が本当だとしたら、アゲートは『戦士』と呼ぶよ

り『ウェポン・スペシャリスト』と呼んだ方がしっくりくるのかもしれない。そう思いながら4本目の新しいタバコに火をつけた。

その直後、ことが大きな方向へ傾き始めた。リングの上で今一度大きな金属音が響き、会場がざわめき出した。

リングでは体を転がして外へ逃げたアゲートが片膝をついて息を荒らげている。対する相手もかなり息が上がっているようだが、膝はまだついていない。それどころか余裕すら窺える笑みを浮かべていた。

そう感じさせるのも仕方ない、ついさっきの一撃でアゲートの斧がとうとう悲鳴を上げてしまったのだ。奥歯を食いしばりチラリとみて確認すると先端の刃はすでに刃こぼれており、こんなものでは大根一本だって切れそうにない代物に変わっている。それどころか刀身全体にわたって大きな亀裂までできている。これでは次の一撃を加えた瞬間間違いなく砕け散ってしまう。

もともと武器と武器の相性が悪すぎたのも原因の一つかもしれない、大きくて重いものを切断するための斧に対し、固いものや巨大なものを破壊する目的で開発されたあのハンマーでは重量階級が違いすぎる。まるで兎が牛と相撲をとるのと一緒、勝ち目なんかハナから無かったのかも知れない。

だからこそあの顔がムカつく。まだ勝負も決まっていないのに完全に勝ち誇ったかのようなあの顔、表情・・・憎たらしくてたまらない。悔しくてたまらない。

「正念場だな」

「・・・・・・・・アゲート！！男を見せろ！！貴様の力はそんなものなのか、そんな体たらくでこの俺の義弟が務まると思っているのか！！？」

堪え切れなくなり、虎眼が思わずアゲートの背中へ檄を飛ばしてしまった。そしてその声は確かにアゲートへ伝わる。

・・・まだ負けていない。まだ武器は生きている、足腰も言うことを利く、10カウントもまだ。

まだ戦える！！

渾身の力で立ち上がると、そのまま加速をつけながらアゲートは跳躍した。これは時々見たことのあるアゲートお得意の技だ、ここで勝負をかけるつもりらしい。

「バール・クラッシュアアアアアア！！！！」

気合一発とばかりに、上体逸らしからの前屈運動、重力加速、体重、全てが加算された必殺の一撃。相手も勝負に答えてくれたのかこの攻撃を正面から受け止めてくれる

ようだった。アゲートの渾身の一撃が勝つか、あの鋼の拳骨が勝つか、緊張の一瞬が訪れた。

ガシャアアアアアアアアアアン！！！！

勝負は決した、アゲートの斧の負けだった。

触れた瞬間火花が散ったかと思った直後、地面に落としたガラス板のように刀身はバラバラに碎け散ったのだった。アゲートの手に残されたのは斧とは呼べないただの鉄の棒っきれ一本と、腕全体まで響く痺れだけだった。それからアゲートは柄を握ったまま、まるで力を失ったように項垂れてしまった。

「決まってしまったああああ！！チームA A A Aの代表アゲート選手のバトルアックスが、羅刹の拳の前に碎け散ってしまったああ！！これはもはや続行不可能、この試合の勝者は・・・」

「まださ！！！！」

レフリーの判定を打ち消すかのように、アゲートが俯きながら叫んだ。

まだ終わってなどいない、持ち上がったアゲートの瞳にはまだ闘争の炎が燃え盛っていた。

アゲートはそのまま刃のなくなった斧の柄を掴み直すと、片手で、両手で、前で後ろでそして頭上で、まるで孫悟空のような華麗なスティックアクションを披露し、さっきとは全く違う体制で構え直した。

「まだ終わってないさ、刃がなくなったって、この柄だって『斧』の一部のはずさ！」

屁理屈にしか聞こえないアゲートの弁解にレフリーは混乱し判定をどうしようか迷う中、向こう側はやる気満々のようだった。レフリーを無理やり払いのけると、またアゲートの前へ躍り出てきた。

次は相手の攻める番だ。豪快にハンマーを振り回し、アゲートをリングの縁まで追い詰めようとし始めた。その腕捌きは今まで見せつけられていた時以上で、憶測100kg単位はありそうなあのハンマーを時折片腕だけで振り回す様には誰もが圧巻された。そして今度は異常なまでの筋力を駆使したスピードが加わり苦戦を強いられる・・・と誰もが予想したのだが、そうはいかないのがアゲートの実力だった。もっとも重量の重い先端部がなくなり軽くなったことで、棍としての役割を果たすこととなった柄は、今まで以上に巧みに攻撃を無駄なく受け流してくれている。

それどころか今度は軽快な小技の利く棍の方がこの戦いに有利らしく、スキを突いた小さな攻撃が確実にヒットしている。

頭上から飛んできた巨大な拳をバックステップで軽やかにかかわすと、棒を水平に持ち替えて正面へ突出し相手の握り手を狙った。この刺突は槍の技術だ。

正確に右手を突くことに成功すると、相手の腕がハンマーから離れてくれた。その貴重な瞬間を見計らい再び跳躍すると、今度は縦に回転を加えながら落下して襲い掛

かる。

「デーモン・スマッシュウウウウ！！」

バールクラッシャーに回転を加えられた新たな技、デーモンスマッシュは確実に相手の脳天を貫いた。あのバカ力の一撃をモロに喰らったとたん、頭をリングに叩きつけられて動けなくなってしまった。

「くはあ・・・くはあ・・・かはあああ・・・よっしゃあ！！！」

完全な勝利を確信し、アゲートが雄叫びを上げ両手を掲げると、観客もそれに賛同するように大きな声援で爆発した。

突っ伏した男のカウントはとられていく中、リング外で見守っていたジンは小さく拍手し、虎眼も満足そうに頷いている。何の文句もない勝利だった。

しかしそうは問屋が卸さない、文句のある奴が一人いる。

6カウントを取られた直後、強引に落とされていた脳のブレーカーが再び蘇り、男が立ち上がった。

頭から血を滴らせながら、両眼を血走らせながら、牙を剥き出しにして。足を震わせているのは確実にダメージが残されている証拠だが、あの目はまだ死んでいない。

レフリーの確認を取った後、再び試合が続行された。今一度気を引き締め直して構えるが、今度はまたアゲートの目が丸くなってしまった。

あのハンマーはまだギミックを一つ隠していたようだ。

そのギミックというのがまた度肝を抜いて突拍子もなく、あろうことか柄の部分と先端の拳骨が分離してしまい、おまけにその拳骨部分には握り手部分があるらしく右腕に装着、本物の鋼の拳へと様変わりしてしまったのだ。

ゴングと同時に向こうが駆け出し、気が付いたころには自分の視界いっぱいにあの拳が迫ってきた。慌てて棍で受け止めるが、数百kgオーバーの一撃は平気で鉄の細い棍をへし曲げ、体重70kg前後のアゲートは軽くふっ飛ばされてしまった。

両足で踏ん張り場外までは何とか免れたが一気にピンチになったことに変わりはない。手元にある唯一の棍はコの字に変形し、もう使い物にならなくなっている。だからと言って諦めはしない、棍としての役割が担えないならまた新しい形に生み直すだけなのだ。

コの字の真ん中部分を握り、雑巾絞りのように力いっばいに捻じると、何とか2本に上手いこと折れてくれた。後は短い方を握ればどうだ、一瞬で棍からトンファーに早変わりだ。

多少歪だが、まだ戦える。会場全体のどよめきを完全に無視し、二人はもう一度正面でぶつかり合った。

勝負はまさに一進一退、アゲートのトンファーが脇腹をえぐったかと思えばお返しと言わんばかりに容赦なく腹に拳骨が食い込み、さらにそこから顔面を殴打すると顎へ重たい一撃が返ってくる。

もう誰も声を発することができなくなった。観客全員が、ドクターとジェットも、リング外のジンと虎眼も、ただじっと二人の行方を静かに見守る他できなくなっていた。

お互いが血反吐にまみれ、息も絶え絶えてきたころ、相手がとうとう勝負に出た。最後の残されたすべての気合いを拳に込めアゲートの顔面へまっすぐのストレートを繰り出した。しかし分売はアゲートに上がる。あの拳のタイミングはすでに体で把握済み、ギリギリまで引き寄せてからまさかの大股大開脚。下へ逃げ道を作り、紙一重

でこの攻撃をかわすとトンファーを縦に持ち替え、鎌のように構える。

すかさずガラ空きになった右腕の肘と手首に引っ掛けると、その場で使える腕力全てを駆使して一気に引っ張るとどうだろうか？

ゴキンッ！！という大変聞き苦しい音と共に肘が絶対に曲がってはいけない方向へ曲がってしまい、男が悲鳴を上げて拳骨をリングの上へ落してしまった。

片膝をつき、肘を抑えて悶絶する相手に対し、アゲートは最後の手段を実行することにした。さっき落としたあの拳骨・・・棒っきれの鎌をその場に捨てると急いで拳骨を拾った。そのまま持ち上げてみるがこれが本当に重いなの、百キロ単位は伊達ではなく今は両手で支えるのがやっとの状態である。これをあれだけぶん回していたこの男の筋力にはさすがのアゲートも感服してしまう。

だけどそれもこれまで。大きく振りかぶり、体内に残されたわずかな体力と気合を全部出し切り、雄叫びと共に拳骨を振り抜いた。

相手が気が付いたころにはもう遅い、目の前に拳骨が迫ったかと思ったとたん・・・

ゴギャアアアン！！！！

いた全ての感動を捨ててしまった。
最後に占めの一言をどうぞ。

「ダメだこりゃ」

続く

後書き

重要な原作文を書いたノートが紛失してしまい思い出しながら書くのはとても大変でした。

だけどついでにパッチを当ててシナリオを微妙に変更しつつ、いい展開へ話を持ってくるのは少し楽しかったりするので、そっちはそっちで良かった。(笑)

読んでくれてる皆さん、ありがとうございます。

おまけ 名前のネタバレ

メインキャラクターの名前は全部宝石、パワーストーンで統一
(もう知ってるか?)

ジン・K・ジェイド

→ジンカイト (紅亜鉛鉱) +ジェイド (翡翠)

石言葉 「想像力、個性、復活」「健康、長寿」

アゲート・モルガナイト

→アゲート (瑪瑙) +モルガナイト (緑柱石)

石言葉 「行動、成功、勇気」「かわいらしさ、性格のよさ」

ジェット・アメジスト

→ジェット (黒琥珀) +アメジスト (紫水晶)

石言葉 「忘れ去る」「誠実、心の平和」

ファントム・C・タンザニヤ

→ファントムクリスタル (山入水晶) +タンザナイト (灰廉石)

石言葉 「潜在意識」「誇り高い人」

古虎眼

→タイガーアイ (虎目石)

石言葉 「洞察力」

古猫眼

→キャッツアイ (猫目石)

石言葉 「恋愛、美」

これらから色々もじって性格を設定しています